

『清明のソラ』

著：朝丘 戻

ill：yoco

7月29日（日）

「わあ、素敵な部屋だね、お邪魔しますー……」

「ふふ。いらっしゃい結生と忍。外暑かったでしょ？ 涼しくしてるよ」

結生に続いて、忍も靴を脱ぎながら「ほんと、暑すぎた……」とぼやきつつ、新さんと俺の家へ入ってくる。

新さんと同棲を始めて、この夏で一年四ヶ月ほど経つ。ふたりでおしゃれにしようと決めて四つ葉のクローバーの押し花額を飾っている玄関や、本棚の隅にミストの噴きでるアロマランプをおいてレモンの香りで満たしているリビングなどを、結生が「ほわあ……」と眺めて感激してくれている。新さんと目をあわせて、ふふ、と笑いあった。

おしゃれに、なんて言ったって、疲れていればソファに本や靴下がおきっぱなしになったり、アロマランプに水を足し忘れてたりして、俺らのズボラが浮き彫りになることはしばしばある。というか普段はほぼそんなカオス状態だ。だから今日は結生と忍を迎えるために朝から新さんと掃除をして、ふたりでばっちり“素敵でおしゃれなおうち”を演出しておいたのだった。

「どうぞ、ふたりともこっちのソファに座って。いまお茶持ってくるから」

「ありがとう日向。——あ、これおみやげ持ってきたんだよ、よかったら新さんと食べて」

「え、おみやげ？ そんな、ごめんね気づかしてもらっちゃって、ありがとう……」

「とんでもねえよ。夏っぽい可愛いゼリーだから、味と一緒に楽しんでね」

印象的なきらめく瞳をした結生が、笑顔で袋をくれる。夏っぽいゼリー……どんなだろう。

「結生君がよければ、いまから冷やしておいて、あとでみんなと一緒に食べようよ」

俺の横にいた新さんがそう言い、結生も「あ、はい。ぜひ」とにっこりうなずく。それで、俺と新さんは一緒にキッチンへ移動して、お茶菓子の用意をした。

「結生君、爽やかで可愛らしい子だね」

俺の横に寄り添って、新さんが麦茶をそそぎながらこそりと小さな声で言う。

「うん、目がおっきくて手も細くて、あの瞳と手で『ライフ』の子たちが生まれたんだ～……って、ついじっと見惚れそうになっちゃったよ」

俺も、ほう、とうっとり息をつき、結生にもらったおみやげの包装紙をあけていく。

「目はひなのほうが大きいんじゃない？」

「そうかな。自分じゃわかんないや」

「手も、ひなだって可愛いよ」

「……なんで俺のこと褒めてくれてるの新さん。いま結生の話してたんでしょ」

「照れる日向も可愛いな」

喉で笑う新さんを横目で睨む。頬が熱い……。なにこんなところでこそこそいちゃついているんだか、と自分たちに呆れつつ、俺はゼリーの箱をあけた。

「わ、すごいつ、素敵……」

なかには、まるい容器に赤と黒の金魚を浮かばせた、透明なゼリーが七つ入っている。

「ああ……結構有名なゼリーだね、これ」と新さんが。

「そうなの？ こんな素敵なゼリー初めて見た」

「前に仕事でいった百貨店のギフト売り場で見かけたことがあるよ。でも、俺も食べる機会はなかったし、こうしてきちんと見るのも初めてだ。たしかに素敵だね……」

「さすが新さん。俺はおみやげ知識もなんにもないよ、結生もやっぱチョイスが違うな……」

ひとしきり感激したあとゼリーを冷蔵庫にしまい、新さんとお茶菓子を持って戻った。

「おまたせ～」

テーブルに麦茶と、お菓子のかごをおく。「お気づかいすみません」「ありがとう」と軽く頭をさげる結生と忍がならんでいるむかひのソファに、俺と新さんも「いえいえ」と腰かけた。正面にいる結生と目があうと、照れてにやにや微笑みあう。なんか恥ずかしい。

「外暑かっただろうし、どうぞ、好きに飲んで食べてね。——結生、ゼリーもありがとうね、すごく可愛くて素敵でびっくりしたよ。絵を描く人は選ぶものも違うんだなああって感動した。センスもだし、素敵なものを見つけるセンサーがあるんだろうね。あとで食べるの楽しみ」

「ひひ。褒めてもらっちゃって悪いけど、あれ彼氏に教わったの。うちの彼氏無駄におシャンでさ、“なにか素敵なおみやげないかな”って訊いたら一発で教えてくれたんだ」

「彼氏さんもセンスいいんだっ。そんな人に好かれる結生はおシャンの頂点ってことじゃん」

「ははっ、なんだよおシャンの頂点って」

ははは、とふたりで笑うとみんなもつられて、リビングが笑い声に包まれた。

「つか、日向と新さんのこの部屋もインテリアがおシャンだよ。男がふたり住んでる部屋だと思えねえ」

結生が麦茶を飲みながら控えめに周囲を眺める。窓から入る日ざしが観葉植物を照らしていて、透明テーブルも光っている。俺らの下には夏用の藎草ラグを敷いており、足もとも涼やか。そして手もとにあるコップは、もちろん豊シリーズだ。

「俺もインテリアは新さんにいろいろ教わったよ。いちばんの自慢はこのコップ」

豊シリーズは俺たちにとって特別な陶食器で、うちにあるものは全部“豊”でそろえている。夏場は白地に、筆で淡い水色の線をすっとうひいただけのシンプルな柄のセットを使用していた。コップは口がひろく、高さ十センチある大きめのもので、結生も「うん、これすげえ素敵って思った」と顔の位置にあげてまじまじ観察してくれる。

「うちの食器は全部、新さんが創ってるんだ。デザインを決めたり、売りかたを考えたり」

「えっ、まじで？ めっちゃすごいじゃんっ、新さんも作家ってこと？」

「いやいや」と新さんが苦笑して、コップから口を離した。

「創作なんて大それたものじゃないよ。一応この豊シリーズっていう自社ブランド企画をまかされているけど、ああしたいこうしたいって我が儘を言って、部下を困らせてるだけだから」

「……それ、うちの彼氏とちょっと似てるかも。決定権持って、上で部下を動かすのも大変なことなのに、デザイナーとか広報とか全員をリスペクトして、大事にしながら人を幸せにする作品を世に送りだしてるんです。似てる、なんて、彼氏にも新さんにも失礼だけど……うん。このコップ見ても新さんの素敵さわかります。“豊”って名前だけでも心が温くなるし」

へへ、とはにかんだ結生が、コップに口をつけて麦茶を飲む。新さんを見ると、彼も「まいっただな」とうつむき加減に微苦笑していた。……ここ最近、新さんは夏の催事と春に発売する豊シリーズの新作企画のために忙しい毎日を過ごしていた。だから、初めて対面する結生に、初めて手にした豊シリーズをこんな言葉で褒めてもらって、どんな気持ちかは察しがつく。

「ありがとう結生君」

「いえ、すみません。なにも知らないのに勝手なことべらべらと」

「ううん、嬉しかったよ。……日向に救われたときのことも思い出した」

「ぶはっ、なんだよ、のろけかよっ」

あはははっ、と結生が大笑いして、俺たちもまた笑った。忍だけが「さっきからあなたたちみんなのろけてますから」と淡泊につっこんでくる。

「なんだよ忍、拗ねんなよ、自分とこが微妙だからって」

「結生さん」

不機嫌そうな目で忍が結生を睨むと、結生はべっと舌をだしておちゃらけた。へはは……。

「ねえ新さん。その日向に救われたって話、ぜひ聞かせてください。チャットで、文字だけで話しながら、救われてたんですよね？」

結生の瞳がらんらんと輝きを増した。新さんも「うん、そうだよ」とこたえる。

「声も顔も知らなくて、性別も間違えてたのに？」

「そうなんだ。あのころ日向はまだ受験生で、女子高生だと思ってた。恋愛が始まるとしても実際会ってからだろうと考えてたけど、友情以上の好意は、文字だけで芽生えていたね」

「……日向が男って知ったとき、新さんは腹が立った？」

「ううん。日向が性別を偽ったのは、そもそも俺が“ヒナタ”ってアバター名を女性と勘違いしたせいだったんだ。だから責める権利はなかったし、ゲイだから『アニパー』の世界に縋って夢を見たかったっていう切実な告白を聞いて、日向の狡さも健気さも痛みも、背負いたいと想ったよ。むしろ女子高生だったら冷静に好意を抑えて友人関係を貫いていた。日向がゲイで、そのことに苦しんでいる孤独な子だったから、性指向は罪ではないし、日向も人に愛される子だってことを、すぐにでも教えてあげたくなかったんだ」

結生が右手の拳をふって、「くう〜っ」と興奮する。

「はあ〜っ、たまんね〜！ ……ゲイの孤独って俺もわかるし、それを新さんみたいなでっかい愛情で包んでもらっちゃったら、そりゃ幸せだよな……めちゃんこロマンチック〜っ……」

俺は新さんの告白に涙をこらえつつも、結生のはしゃぎっぷりに赤面してしまう。

「ありがとう新さん、結生……性指向のことはずっとひとりで悩んでたから、共感してくれる結

生に会えて嬉しいよ。結生もゲイの孤独感を彼氏さんに包まれて好きになったりしたの？」

訊ねたら、結生の眉が「う」といびつにゆがんだ。

「そう、だけど……俺のここはあんまロマンチックじゃねえよ。俺らは最初、セックスするために『アニパー』つかってリアルで会ったからさ」

「えっ！ そっち!？」

「うん。俺ノンケ相手に失恋した過去を乗り越えたくてさ、ゲイとして楽しく生きるんだってばかな方向に意気込んで、ヤリチンって嘘ついてセフレ探したの。それで怒らせちゃって」

「な、なんでそんな嘘っ」

「バージンって言うとフラれまくるんだもん。で、初日は喧嘩して別れたんだけど仕事で社長とデザイナーとして再会できたんだ。そこから、挿入まではシないへんてこなセフレ関係になつて、みたいな」

「と……とても、大人な出会いだったんだね……」

「彼氏もゲイだったから、過去の失恋も慰めてくれて、孤独感は癒やされていったよ。けど、ロマンチックだったかっていうと疑問かな。かわりに幸せな経験とか思い出は進行形でいっぱいもらってる。ふふ」

セフレ、か……。

「……ひな。興味津々な顔してるよ」

新さんに指摘されて、「へっ」と肩が跳ねた。

「ち、違うよ。『アニパー』にもセフレ目的の出会いってあるんだな……って驚いただけ」

新さんのしずかで微妙に怖い表情に狼狽していると、結生が「はは」と笑った。

「そっか、性別偽ってたってことは日向たちはゲイルームで出会ったわけじゃないんだもんね。あそこは恋人同士で仲よくいちゃついている人たちもいれば、恋人欲しがってる人もいるよ。セフレ探してる人はプロフで主張して、わりと上品にやってる感じかな」

「そうなんだ……俺たちも、一応ゲイルームはたまにいくんだよ、友だちがいるから。でもセフレ探してる人と会ったことはないな……気づいてないだけかな？」

「あ、友だちいるんだ？」

「うん。新さんとのことで、相談に乗ってくれた人たち。いまはリアルでも交流があるんだ」

「まじか、日向たちは『アニパー』の素敵な出会いに恵まれてんだな～」

「素敵どころかすごい人なんだよ。灰色オオカミのシイバさんと、ぼろぼろウサギのソラっていうんだけど」

「え」

新さんと顔をあわせて、ちょっと得意になって笑いあった。結生は麦茶をぐいと飲み、はあ、とひとつ息をつく。

「日向……そのシイバさんって、大柴さん？」

お。

「うん、そうだよ。あそっか、結生は『ライフ』を創った人だから知ってたのかな？ 俺たち『ライフ』と『アニパー』の偉い人たちと友だちなんだ、むっちゃ嬉しい～」

自分でも笑顔になっていると自覚しながらうなずいた……けど、結生はうなだれて右手で額を押さえる。……あれ？

「どうかした？ 俺、なんかマズいこと言っちゃったかな……？」

「いや、いいんだ……。てか日向たち、リアルでつきあいがあるって言ったよね。大柴さんが同棲してる彼氏のこと、リアルで知ってるってこと？」

「うん、知ってるよ。一緒にしゃぶしゃぶパーティしたりしてる」

「しゃっ……しゃぶしゃぶ……」

結生は明らかに困惑しているようすで、俺も「え、なんで、大丈夫？」と動揺する。

「結生君はシイバさんのプライベートまでは知らなかったのかな」と、新さんが助け船をだしてくれた。

「や、すみません……じつはそうなんです。シイバさんとは『アニパー』で知りあいだったんだけど、大柴さんだっという確信を持ってなかったんですよ」

「えっ、じゃあ俺、勝手にバラしちゃった!？」

焦ったら、結生も「訊いたの俺だよ」と苦笑いでなだめてくれる。

「ありがとうな日向。利用するような真似してごめん。俺らも“もしかしたら”って予感してたから、この際リアルでも繋がってみるよ」

「ほ、ほんとに大丈夫……？ 個人情報暴露しちゃったよね俺……」

「暴露させたのは俺だってば。平気だよ、もともと俺は大柴さんに誘われて、この業界で働き始めたからあの人は恩人なんだ。うちの彼氏は大柴さんの大学の後輩だし、おたがい浅い仲でもない。いい機会だから、俺らも腹割ったつきあいできたらなって思う」

「恩人……大学の、後輩……」

そりゃあ俺としては、結生と結生の彼氏さんと、大柴さんと一吹と、みんなと仲よく交流できたら嬉しいけど……迷惑をかけていなければいいな。『アニパー』もひろいようで、意外と狭い。ゲイ仲間が集まると、どうしたって出会う確率は高くなるのかもしれないけれど。

「……縁ってあるものですね」

ぽつと忍が呟いて、お菓子のかごからチョコクッキーをとった。結生が突然にやけ顔になり、忍の肘をつく。

「おまえはどうなんだよ～、受験生の彼氏には相変わらずつれなくされてんのか～？」

「大きなお世話ですよ」

「俺らののろけ話ばっかじゃ悪いし、おまえも話してみ？ 恋愛相談でもどんとこいだぜ！」

すこし沈んでいた場を明るく和ませるように、結生が格好よく胸を張る。

「日向も知ってるだろ？ 忍に彼氏がいること。こいつこんな態度でかいくせに、ものすごい一途で、切ない恋してんだぜ。歳下の彼氏に全然頭あがんねえの。こいつのことそこまで弱らせる彼氏って、いったいどんな奴なんだろうなあ～？」

心臓にちくりと刺激が走って、へは……、と苦笑いでにごす。忍はクッキーを咀嚼しながら結生を睨み据えて、麦茶を飲む。

「ばかですね結生さんは」

「あ？ なんだと忍」

「前に俺は幼なじみの弟とつきあってるって教えたじゃないですか。この状況で、なんでわからないんだか疑問ですよ」

「へ」と結生が大きな目をまたたき、忍と、新さんと、俺を見る。そして、あ！ と瞠目する。

「まさか、忍の彼氏の義兄ってのが、日向……？」

俺もうなずいて小首を傾げた。

「うん……そうだよ。俺の義弟が、忍の恋人の直央なんだ——」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>